

しらおか歴史物知りシート

No.4-3

こもれびの森・歴史資料展示室

【白岡のお茶栽培】 明治政府は、欧米諸国に追いつけ追い越せとばかりに、「富国強兵・殖産興業」を推進します。当時の日本の主産業は農業であり、砂糖、綿、大豆、菜種、タバコなど農業加工品の輸出で外貨を得ていました。なかでも生糸と緑茶は主力商品として様々な支援が行われたり、振興組織が作られたりしていきます。市内では、旧日勝村域で盛んになります。その魁となるのが長寿園の齋藤長蔵翁です。この碑文は、爪田ヶ谷観音堂にある齋藤家墓所に建てられています。

長寿園記

長寿園双鶴翁以茶業致富名于世翁嘗謂邦人常欲輸出之多而徒袖手説之未知其可也明治五年種茶子于其家園寒風暑雨培養莫所不至焉無幾茶樹漸長茶之製出年多一年於是乎自遊于宇治狭山覃思數年頗有所得明治十六年会有第二会内國製茶共進会之拳翁乃出其製茶受賞狀木杯之賜名聲頓籍甚琦玉製茶之名遂喧于海内而輸出之數日加多嗟乎翁之偉績信可以伝于後矣余聞之日長壽園之茶煎之芳香不褪是其所以得長壽之名也況製于双鶴翁之手喫其茶亦可以保壽焉園在埼玉県南埼玉郡日勝村爪田ヶ谷翁通称長蔵齋藤氏

明治三十三年五月

貴族院議員野口褻題額選文併書 石家祐助刻字

【意訳】

長寿園記

長寿園の双鶴翁は、茶業で名を残した方です。翁はかつて、日本人は、多くの産品を輸出したいというものの、実り無い議論をして手をこまねいているばかりで、やればできるということを知らないといっていました。翁は、明治五年、茶の種子を家園に蒔き、寒い日も暑い日も、丹精込めて栽培しました。その結果何本かの茶樹がようやく成長しましたが、お茶として出荷できる年は多くはありませんでした。そこで翁は、宇治や狭山に勉強に出かけ、数年にわたり深く考え、とてもたくさんのお茶を得たといっています。明治十六年、第二回内國製茶共進会に出品した翁の茶は、賞を受け木杯をいただいたのです。名声は急速に上がり、多くの茶業組合などにも属することとなりました。琦玉製茶の名は評判が高く、世界中に輸出するようになったのです。翁は、年月を加えても努力し茶業に励みました。私は、翁の偉大な業績は後世に伝えるべきものだと思っています。長寿園と名づけられた理由は、同園の茶を煎じる芳香がいつまでも変わらず長く続くようにとの願が込められていたからだと聞きました。もちろん、双鶴翁の手で作られた茶を喫する方が、健康で長寿を保つことはいくらでも無いことでしょう。園は、埼玉県南埼玉郡日勝村の爪田ヶ谷にあります。翁の名は齋藤長蔵といえます。

長寿園の碑（爪田ヶ谷観音堂内）



*：野口 褻（のぐち けい）現在の杉戸町茨島出身の国会議員

明治8年における市内のお茶の生産額は、上野田で300斤、下野田で180斤、爪田ヶ谷で72貫、篠津で37斤、高岩で175斤ありました。1斤は0.6kg、1貫は3.75kgにあたりますので、換算すると市域全体では685.2kgとなります。爪田ヶ谷の72貫は、270kgですので、全体の約4割に相当します。

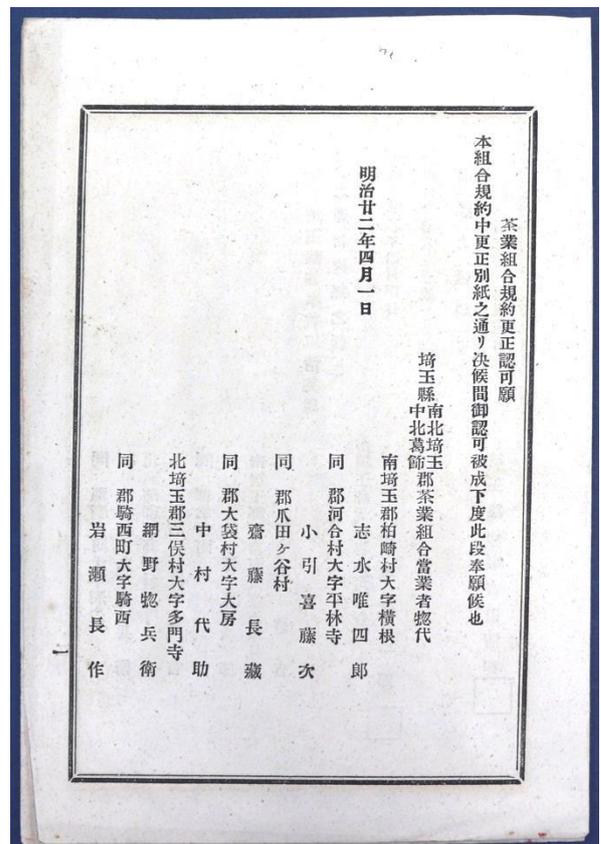
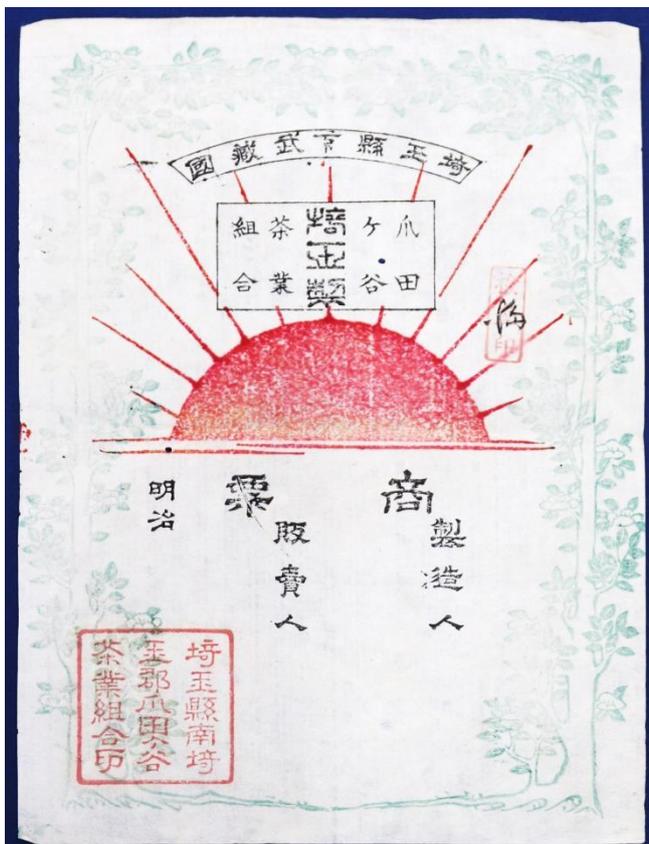
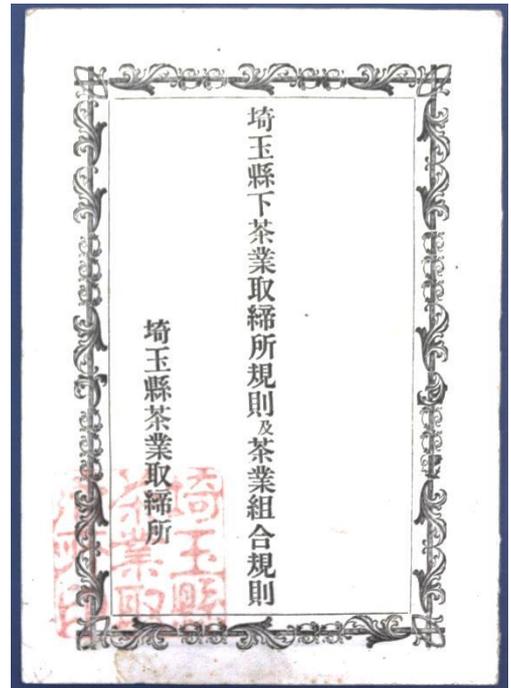
爪田ヶ谷が、早くから他地区より茶栽培が盛んであったのは、前述の「齋藤長蔵」が製茶振興に努めたためだと言えます。

齋藤長蔵は天保6年(1835)の生まれですので、茶栽培を始めた明治5年は38歳であったこととなります。

長蔵は、茶どころの宇治や狭山^{じゅうせんほう}で揉捻法や蒸法などの製茶技術を習得し、帰宅後も芳醇な茶を造る工夫を重ねたといいます。その甲斐あって明治16年(1883)の第2回内国製茶共進会で受賞しました。記念碑にあるように、長蔵の名はもちろん、埼玉製茶の評判も広がってゆきました。

一方で、輸出量の増加に伴って、粗悪品の流通も目立つようになったことから、明治17年には、「埼玉縣茶業取締所」が置かれ、様々な取り決めがなされています。

また、各地域の組合の設立等も推奨され、同19年3月には「埼玉茶業組合」が設立、次いで「埼玉縣南北埼玉 中北葛飾郡茶業組合」もできあがり、齋藤長蔵も総代として名を連ね、茶樹の害虫防除や茶の貯蔵法、荷造法の普及や品評会の開催などに尽力していたことがわかります。



写真左は、「爪田ヶ谷茶業組合」の商標です。周囲に茶樹があしらわれ、旭光を背景に「製造人」「販売人」「出荷期日」の記載欄が設けられています。右は、「埼玉縣南北埼玉 中北葛飾郡茶業組合」の規約更生認可願」です。総代氏名を記した中ほどに齋藤長蔵の名前が見えます。